

英詩に見る子供の姿 (四)

松原至大

赤ちやんの足 (スウィンバーン)

ピンク色の貝がらのような

赤ちやんの足。

天國で出會いでもしたら、

天使のくちびるは

キスをせずには

おかないかもしれない

赤ちやんの足。

ばら色のインギンチャクのように、

暖かい方へ差しのべられたり、

ひろげられたり、

ちらちらと動いたり

離れ離れになつていて

それでも繕がつている

十本のやわらかい芽。

天から與えられた美しさに輝く
ふくらんだり縮んだりする

またとない鈴形の花。

まだ足あとのない人生の絶壁の上に

輝いているような

赤ちやんの足。

これは詩人として、劇作家として、また文藝批評家として知られたイギリスのアルジャーノン・チャールズ・スウィンバーン(一八三七年—一九〇九年)の作である。赤ちやんの足をとらえて、かわいさと美しさとはばかりではなく、前途にひかえたかも知れない人生への嚴肅さを考えさせる。

スウィンバーンとほとんど時代を同じくしたイギリスの詩人に、ジョージ・マクドナルドがいる。彼がうたつた「赤ちやん」は、次ぎのとおりである。

かわいい赤ちゃん (マクドナルド)

お前はどこから来たのかしら。

「どこからか、ここへ来たの。」

お前はそんなに青い眼を

どこで頂いて来たのかしら。

「私が来る途中、あのお空から。」

なにがその眼の光を、

きらきらぐるぐるさせるのかしら。

「お星さまの光が残っているの。」

お前はあの少しの涙を

どこで頂いて来たのかしら。

「私がここに来た時、

私もそれに気がついたの。」

なにがお前の頬を

そんなに滑かに高くしたのかしら。

「私が来る途中で、

柔かな手がそれをたたいたの。」

なにがお前のほほを

暖かい白ばらのようにしたのかしら。

「私はたれも知っていないよ

よいものを見たの。」

あの心からの喜びの

三つのえくぼは何うして。

「三人の天使が

一度にキスをして下さつて。」

お前はこの眞珠の耳みゆを

どこで頂いて来たのかしら。

「神さまがお話しなされたの、

そしたら、聞こえるようになったの。」

この腕と手は

どこで頂いて来たのかしら。

「愛がそのつながつたものを

作つてくれたの。」

足、それはどこから来たの、

かわいい足。

「天使の翼と同じ箱の中から。」

それがどうしてみんな

お前のものとなつたのかしら。
「神さまがお考えになつたの、
そして私は育つたの。」

そんなら、どうして

お前は私たちのところに來たのかしら。

「神さまがお考えになつたの、
だから私はここにゐるの。」

以上の二作を比べて見ると、二つながらなん等の新奇なものを見出しがたいが、十二分に詩人の高貴な心が、私どもの心に流れてくるように思える。しかもそれは人の親として、いなみ得ない美しさ、楽しさである。

少年の歌 (ホグ)

輝いて深いお池のあるところ、
灰色の鱗がじつと眠つてゐるところ、
川をのぼつて、草原を越えて——
それがピリーとぼくの行くところ。

黒鳥くろどりがおそくまで歌つてゐるところ、
さんざしの花が美しく咲いてゐるところ、
ひな鳥がさえずつたり、
かくれたりするところ——

それがピリーとぼくの行くところ。

草刈がきれいに草を刈つたところ、
乾草がうす高く、緑色してゐるところ、
お家へ急ぐ蜜蜂を追いかけるところ——
それがピリーとぼくの行くところ。

それはぼくにはわからないこと。

はしばみの土手の急なところ、
木かけが深々としてゐるところ、

すずなりの木の實がしきりに落ちるところ、
それがピリーとぼくの行くところ。

なぜ男の子たちは、

おとなしい女の子を

遊びからしめ出したり、いじめたり、
けんかばかりしたがるのだらう。

それはぼくにはわからないこと。

でもぼくはこれだけは知つてゐる、
ぼくは遊ぶのが好きだ。

草地を通つて、乾草の間で、
流れをのぼつて、草原を越えて、
それがピリーとぼくの行くところ。

になり、わが國の財政のたちなおりの時をつかんで、義務就學制を布くことができるような日を、早く迎えたいものである。

新生の幼稚園には、實に多くの問題と困難とが待ちかまえている。折角の入園希望者の増加にもかかわらず、充分な収容力がない。設立しようとしても資材がない。經營が充分でない。その經營はインフレの影響を受けて、困難をきわめている。先生の待遇も低い。これに堪えて、その中で、いろいろどりの花を咲かしている樂園の花守りの御苦勞はなみ大いではなからう。そして、こうした「貧困」の中で、新生の意義にもえている幼児教育者の愛情と熱意が、いつかは、このいばらの道を切りひらくであろうことを私は確信している。

新しい幼稚園——その具體的な内容と方法とは、ひとえに今後の歩みによつてきまる。米國や英國でいえば、ナーサリー・スクール（幼兒學校）のように普及し、そうした經驗に近いものになるであらうとも思えるし、また、わが國では何か獨特の通をたどるようになるかも知れない。一切はこれからのことである。

〔十頁から〕

これはスコットランドのジエイムズ・ホグ（一七七〇年——一八三五年）の作である。作中のピリーとは、いうまでもなく少女の名である。あるいは彼の幼い日の思出であろう。健康な少年と少女の姿をかりて、美しい人生をうたつてゐる。平明な言葉の中に、明るく男性と女性の今日と明日とが語られている、と思つてはいけないことであろうか。なにげない一の言葉にも、この詩人はいいようのない人生の深さを味わわせてゐる。ホグはスコットランドのウランスリーの森、エトリツク・フォレストに生れて、幼い時から羊飼（シエファード）をしていた。そのためエトリツク・シエファードというペンネームを持つてると傳えられる。（つづく）

×

×

×

×

×

×